

学士課程における助産学教育に関する研究動向

A Reviews of Midwifery Education in Undergraduate Nursing Education

小嶋理恵子^{*1}・兵頭 慶子^{*1}・水畑喜代子^{*1}・永瀬つや子^{*1}

Rieko Kojima^{*1}・Keiko Hyodo^{*1}・Kiyoko Mizuhata^{*1}・Tsuyako Nagase^{*1}

キーワード：助産学教育，助産実践能力，学士課程
midwifery education, midwifery competencies,
undergraduate nursing education

I. はじめに

本学では，2004年より看護教育の学士課程において助産師養成教育を行っており，これまでに15名の学生が卒業している。学士課程における看護学教育は，教養科目も包含した大学教育の基，保健師・助産師・看護師の国家資格取得に必要な教育内容を体系化して教授しているところに大きな特色がある。しかし，同課程における助産師養成教育は，統合カリキュラムによるカリキュラムの過密さ，および実習時間の減少からくる学生負担の増加と実践力不足，また助産師としてのアイデンティティ形成困難などの問題も指摘されている¹⁾²⁾。

2007年4月の「看護基礎教育の充実にに関する検討会報告書」では，助産師養成教育は，全体のカリキュラムが22単位から23単位へ，臨地実習が8単位から9単位へと変更になり，分娩介助実習では，正常産を10例程度直接取り扱うことと明記された。また，助産師教育の技術項目と卒業時の到達度(案)も作成され，実践能力を持った助産師を教育することがより明確に求められてきている。

今回，先行研究の検討を行った結果，本学における助産学教育を検討していくうえでの示唆を得たので報告する。

II. 研究方法

1. 研究対象

「医学中央雑誌Web版」「CiNii（論文情報ナビゲーター，国立情報研究所）」を使用し，助産教育，分娩介助実習，助産学生をキーワードとして，2000年から2007年までの文献を検索した。会議録を除く，原著（7件），報告（2件），解説（8件）の17件の文献を分析対象とした。

2. 分析方法

17件の文献を，1. 学士課程における助産学教育課題，2. 学士課程における助産学教育方法の検討，3. 分娩介助実習における学生の到達状況と反応，4. 分娩介助実習における教員・実習指導者役割，5. 助産師基礎教育と現任教育との連携に分類し，共同研究者とともに検討を行った（他分類への再掲含む）。

III. 結果

1. 学士課程における助産学教育課題

この内容に関する文献は5件であった。江幡（2004）は，全国助産師教育協議会（全助協）で行った助産師養成課程別調査（大学63校：回収率73%，短期大学専攻科21校，専門学校24校：回収率75%）によって，助産学科目の必須単位数，および総実習時間数ともに大学が一番少ないという

※1 宮崎大学医学部看護学科 小児・母性（助産専攻）看護学講座
School of Nursing, Faculty of Medicine, University of Miyazaki

こと、実習内容が、各学校によって差があるという結果を明らかにした。さらに、同じく全助協で2002、2003年に行った教員に対する調査において、「大学でのカリキュラムが問題である」、「助産師養成課程は大学院・専攻科での教育が望ましい」と答えた割合が、どの教員においても高かったことから、助産師としての質の確保に向けて教育を見直す時期であるという問題提起がされた(江幡・黒田：2007)。我部山(2004)、日隈(2004)も同様に、理論が重視されてきた日本の看護教育の動き、看護基礎教育における技術教育割合の減少と、助産学教育の技術教育が講義・実習ともに読み替えで行われている現状が、助産を専攻する学生の基礎技術能力の低下の要因となっていると指摘した。また、服部・谷口(2005)は、学士課程における分娩介助実習においては、介助技術練習にかかる時間が学生1人あたり20~30時間であり、これらが時間外の補習になっていること、分娩介助実習と平行して、継続事例の妊婦健診が行われているといった過密スケジュールの中での学生の負担、正常分娩件数の減少による実習の長期化、それに伴う教員、臨床指導者の負担の増大という課題があることを明らかにした。

2. 学士課程における助産学教育方法の検討

この内容に関する文献は3件であった。服部・谷口(2005再掲)は、科目内容の整理と読み替えを行うことで、助産の必須単位を3単位に減らしカリキュラムのスリム化を図りながら、次世代を育成する女性のリプロダクティブヘルスへの援助と、育児期にある家族への子育てと健康への支援も視野にいれた教育内容の構築を可能にしたことを報告した。また、助産師として自己の課題を追求する研究的姿勢の形成に向けて、助産実習を卒業研究に位置づけたことを報告した。中田・佐々木(2006)は、統合カリキュラムの中で構築されている助産科目における看護技術演習の必要性について、学習者のニーズという側面から調査した。そして、助産専攻学生は、母性看護技術演習項目の中で、分娩進行中の胎児や陣痛の状態など、状況判断や助産診断に必要な技術に対する演習・技

術チェックのニーズが高いという結果を明らかにし、演習項目の整理をしていくうえでの視点を示唆した。佐藤喜根子等(2003)は、助産師基礎教育のあり方を検討するために、「分娩期・産褥期・新生児期のケアの項目」75項目について学生評価、および指導者評価の双方から学習到達度を分析した。結果、学生評価が高く、指導者評価が低い項目は、認知、技術領域が混在している診断、分娩時の指導であり、また、異常時の判断・予測・対処行動は、卒業時には不十分であるため、助産基礎教育と卒業後の継続教育との系統的な流れの中で達成する目標であるとした。

3. 実習における学生の到達状況と反応

この内容に関する文献は、6件であった。渡邊・小田切(2007)は、2002年に、看護系学部・学科を有する4年制大学89校(回収率70.8%)、2003年には、助産師養成の短大専攻科28校(回収率75%)、専門学校32校(75%)に対し、【妊娠期】【分娩期】【産褥期】【新生児期】【女性のライフステージ各期】の 카테고리別に、学生の到達状況についての調査を行った。その結果、すべての項目において、短大・専門学校群に比べて大学群の到達状況が低く、特に、【妊娠期】における診断技術、安定した妊娠経過の維持に関するケア、出産・親準備教育に関する項目に関しては、統計的有意差があったと報告した。また、教育課程に関わらず、【妊娠期】【女性のライフステージ各期】の到達状況が低いということを明らかにした。これらの結果から、助産師として自立して診断ができ、ケアを自分の責任で行える実践能力を養うこと、周産期を中核にしながら、女性の生涯にわたる性と生殖の課題に対応できる専門職の育成が求められていると述べた。丸山等(2005)は、学士課程における助産師養成教育によってどの程度の実践能力が備わっているのかを分娩介助評価表の分析から行っており、実習終了時には、すべての実習項目において援助を受けながら技術的に到達できていることを明らかにした。堀内・服部(2005)は、分娩介助例数毎に「助言と少しの援助ができる」に到達している学生の状況を調査した。その結果、

5例目以降より、60～80%の学生が、到達目標に達していると報告した。しかし、10例目の学生の到達度結果をみると、分娩の清潔操作、胎盤娩出、助産計画の立案、分娩進行度の判断が50%と学生間の技術のばらつきが予想される結果も出ていた。また、服部・堀内（2007）は、学生が記述した「助産実習での学び」と「今後の課題」の記録から、「ヒューマンケアの基本に関する実践能力」「看護の計画的な展開能力」「特定の健康問題を持つ人への実践能力」を身に着けていること、学士課程での実習教育の課題としては、「異常時の対応」「チーム連携」であると述べている。村山・渡邊（2002）は、分娩介助実習時の学生のストレス反応を、心拍数と疲労自覚症状調査用紙、ストレス感情調査用紙とあわせて調査した。その結果から、実習開始前の時点で、すでに緊張が高まっており、この状況は、全実習終了までほとんどかわらなかったということ、ストレス感情でみると「脅威」と「挑戦」というマイナスに働く感情とプラスに働く感情の両面を同時に持ちながら実習していることを明らかにした。大野・村松（2005）も、分娩介助実習に関する調査で、学生の1事例あたりの平均実習時間が11時間55分であり、夜勤帯まで実習が及ぶという長時間の拘束のため、心身の疲労や緊張、ストレスを感じていることを明らかにした。

4. 分娩介助実習における教員・実習指導者の関わり

この内容に関する文献は、4件であった。常盤（2002）は、学生の分娩介助技術も、他の技術と同様に、段階を踏んで発達していくと仮定し、学生自身の実習時期に合わせた課題を提示するとともに、指導者、教員も、学生の時期に合わせた段階的な関わりが必要であるとした。また、丸山等（2005再掲）も、分娩介助評価表の分析から、同様の主張をした。古田（2004）は、分娩介助実習において学生が、「わかった」と認識したときの指導者の言語的働きかけについて分析し、その結果、分娩進行状態の把握については、現象を解釈したり、他の言葉で言い換えるような、学生の

理解を助ける言語的働きかけとしての説明、安全で正確な技術を求められる手技では、具体的方法を助言する指示的助言、短時間で変化する会陰保護、児頭娩出介助においては、学生に次の行動を指示する命令的指示や、理由や目的、予測される結果をあらかじめ告げて指示する説明的指示が、学生の「わかった」という認識につながっていたと報告した。堀内・服部（2005再掲）は、分娩介助実習に向けて、分娩介助技術の体得と、事例を用いて診断と予測に関するトレーニングを1ヶ月間行うことで、技と思考過程の強化を行っていること、また、実習前に、指導者・教員の役割と連携について資料を作成し、指導環境を整えること、実習中は、客観的に学生の動きを観察し、具体的な評価に繋げるようにすること、学生の緊張度や疲労度によって休息を促すということも教員の役割のひとつであると述べた。

5. 助産師基礎教育と現任教育との連携

この内容に関する文献は、2件であった。田中（2004）、喜多・村上（2005）は、ともに新人助産師を教育する臨床現場からみた、助産師教育の問題と、助産基礎教育と現任教育の連携の必要性を述べている。田中は、学士課程における助産教育の現状の中で、助産師としてのアイデンティティの低い新人助産師が育っていること、実習の読み替えにより、妊娠から産褥・新生児期へのケア、地域での母子保健活動に対する経験不足と、これらの教育背景、学生背景が臨床に情報提供されない現状を問題として指摘した。現任教育側としては、このような状況を踏まえて、教育体制の確立、安全な技術を提供するために、見学から一人で実施するまで、段階的なプロセスを踏むこと、経験リスト、チェックリスト、分析ノート等のツールの活用を提示した。喜多・村上は、職場で受ける新人助産師のリアリティショックの分析から、妊娠期・分娩期のケアの未熟性、ケアを行う際の先輩との人間関係の困難さ等の項目で、大学課程群が、他の教育課程群と比べより強くリアリティショックを感じていること、その要因として、教育期間の短さを指摘した。しかし、産褥期、新生児期で

は、継続して指導が受けられる体制かどうかといった現任教育における指導体制との関連性があったことから、卒後臨床研修の充実や、教育と臨床の連携に向けた教育システムの構築の重要性を示唆した。

IV. 考察

学士課程における助産学教育法に関する研究動向について概観してきたが、助産の基礎教育を学士課程で行うことには限界があるという立場と、前者で指摘されている問題点の改善に向けて、統合カリキュラムの特性を活かした講義・演習・実習の改善を図ろうとする2つの立場に大別できた。

今回のカリキュラム改正案では、学士課程において、妊娠・分娩・産褥・新生児期における診断能力を身につけること、さらに女性の生涯にわたる性と生殖に関する役割を担える助産師教育の充実が求められている。しかし、改正カリキュラムは、現行22単位から23単位、実習が8単位から9単位の変更であり、課題とされてきた助産師教育にかかる時間が増えるわけではなく、質的工夫が必要である。

また、助産師・看護師統合カリキュラムでは、119単位以上を統合カリキュラムにおいて学習すると定められている。カリキュラムのスリム化を図りながら、卒業後も助産師として自らをブラッシュアップしていけるように、技術の習得だけでなく、助産観を育て、助産や助産の対象に関心を持ち、自らが探求を続ける教育を体系化していくことが、各大学に求められているといえる。

これらの課題に対しては、服部(2005)、中田(2006)の方法を活用しながら、学習内容、助産技術演習項目の精選を図ることで、教育の質の確保ができるのではないかと考えている。特に、助産診断力の基礎となる観察技術については、演習時に提示する事例の検討も含め、思考過程とリンクさせながらより強化していくこと、さらに、清潔操作、手洗い、導尿などの基礎看護技術は、自己技術評価用具を活用するという現在の方法をさらに検討し、工夫をしていきたい。

また、現在、学生は分娩介助実習や、継続事例

実習を通して、指導助産師・教員とともに、助産師として自立して診断し、ケアを自分の責任で行うという基礎的な実践能力を身につけている。教員には、学生が、個々の事例からの学びを積み上げていけるように、段階に応じ指導者・教員の役割を明確にすること、学生の思考過程の確認を行うことが求められている。さらに、教員・指導者・学生間のやりとりを客観的に観察し、学生の理解につながるロールモデルになれているか、適時に適切なアプローチがされているのかを、多角的な視点から分析し、実習環境を整えていくことも必要である。

V. 終わりに

学士課程における助産師養成教育を行っている大学は114大学中91校となった。助産師の社会的な需要は高く、また質も求められてきている。本学では、夏期休暇中に、1ヵ所の個人病院で分娩介助を中心とした実習を行っているが、全員が10例の分娩介助を終えている。実習では、院長である医師と、指導助産師から丁寧な教育を受け、そこで行われている活動への参加を通して、地域における医療サービスについて理解する機会も得ている。そして、継続事例実習では、附属病院の指導者のケアを通して、ハイリスクケアの関わり方や、助産師としての姿勢について考えることができている。

今回、本学における助産学構築に向けての示唆を得るために、文献を検討したが、文献数は17件であり、助産学教育全体を概観しているとは言い難い。特に、助産師基礎教育と臨床における卒後教育の連携についての文献は、キーワードとして検索していないため、さらなる検討を重ねていきたい。そして、それらの知見をもとに、本学のプライマリー、2次・3次医療施設の双方で実習している利点を活かし、教育内容の精選と工夫、構築を行っていきたいと考えている。

引用・検討文献

- 1) 我部山キヨ子：助産学教育における技術教育の現状と将来的展望，助産雑誌，58(3)，197-202，2004
- 2) 江幡芳枝：実態調査からみた助産師技術教育の問題点，助産雑誌，58(3)，204-210，2004
- 3) 江幡芳枝，黒田緑，小田切房子他：大学・短大専攻科・専門学校における助産師教育の実態と分娩介助・継続事例実習指針，[その1]カリキュラム単位数および助産学実習の比較，助産雑誌，61(3)，226-232，2007
- 4) 日隈ふみ子：十分な実践力習得のための教育課程とは，助産雑誌，58(3)，211-215，2004
- 5) 服部律子，谷口通英，堀内寛子他：本学における助産教育の展開と課題（第1報）-助産教育の現状からの検討-，岐阜県立看護大学紀要，5(1)，79-84，2005
- 6) 中田かおり，佐々木和子：助産教育の学内演習における基礎・母性看護技術演習の必要性-学生への質問紙調査による学内演習の評価，国立看護大学紀要，5(1)，2006
- 7) 佐藤喜根子，佐藤祥子，佐藤理恵：助産師学生の卒業時の学習到達度調査-学生と臨床助産師の評価-，東北大医短部紀要，12(1)，11-20，2003
- 8) 渡邊典子，小田切房子，熊澤美奈好他：大学・短大専攻科・専門学校における助産師教育の実態と分娩介助・継続事例実習指針，[その2]到達状況の比較および分娩介助・継続事例実習指針，助産雑誌，61(4)，344-351，2007
- 9) 丸山和美，遠藤俊子，小林康江：＜実践報告＞本学助産学生の分娩介助実践能力の大学卒業時の到達度，山梨大学看護学会誌，3(2)，47-56，2005
- 10) 堀内寛子，服部律子，谷口通英他：本学における助産教育の展開と課題（第2報）-分娩期実習の実際-，岐阜県立看護大学紀要，5(1)，85-91，2005
- 11) 服部律子，堀内寛子，谷口通英他：本学における助産実習での学びの内容，岐阜県立看護大学紀要，7(2)，3-8，2007
- 12) 村山陵子，渡邊典子：助産婦教育における分娩介助実習の検討（第2報）-分娩介助実習での学生のストレス反応の測定-，日本看護科学学会誌，22(1)，44-52，2002
- 13) 大野弘恵，村松十和：助産師学生の分娩介助実習の実態について-本学の実習指導資料からの分析-，岐阜医療技術短期大学紀要，20，41-50，2004
- 14) 常盤洋子，今関節子：4年制大学における分娩介助実習の効果的な教授法の検討-実習状況および実習到達度の分析から-助産婦雑誌，56(6)，507-513，2002
- 15) 古田祐子：分娩介助技術指導において助産師学生に「わかった」と認識させる指導者の言語的教育技法，母性衛生第45(2)，342-352，2004
- 16) 田中春美：助産教育のあり方と臨床現場の問題点，助産雑誌，58(3)，217-220，2004
- 17) 喜多里己，村上明美：赤十字関連施設における新人助産師のリアリティショックの実態と助産教育背景および現任教育における指導体制との関連，日本赤十字看護大学紀要，19，35-44，2005

参考文献

- 1) 看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標（看護学教育の在り方に関する検討会報告）看護学教育の在り方に関する検討会，2004
- 2) 看護基礎教育の充実に関する検討会」報告書：厚生労働省HP，2007
- 3) 看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書．厚生労働省医政局看護課，2003
- 4) 「助産師教育検討委員会」平成18年度事業活動報告書
- 5) 看護学教育にかかる見解 日本看護系大学協議会2006年
- 6) 渡邊典子，村山陵子：助産婦教育における分娩介助実習の検討-全国助産婦教育機関における分娩介助実習の実態調査を中心として-，新潟青陵大学紀要，2，15-26，2002

- 7) 豊嶋三枝子, 堤かおり: 看護学実習における学生の自己効力感に影響する要因—インタビュー内容の分析, 日本看護学教育学会誌, 14(3), 19-30, 2005
- 8) 小山満子, 岡田洋子: 看護学実習評価に対する学生の見解および妥当性に関する検討—学生への面接を通して—, 看護教育, 46(6), 483-488, 2005
- 9) 江本リナ: 自己効力感の概念分析, 日本看護科学学会誌, 20(2), 39-45, 2000
- 10) 安酸史子: 臨床実習指導者に関する研究的取り組みに向けて, *Quality Nursing*, 4(8), 651-657, 1998
- 11) 藤岡寛治, 安酸史子他: 学生とともに創る臨床実習指導ワークブック, 医学書院, 2004
- 12) 宮岡久子: 看護学教育におけるコア・カリキュラムの展望, 福島県立医科大学看護学部紀要, 7, 1-6, 2005